

O-0449

ライフゴール概念を取り入れた目標設定が入院患者の心理機能と意欲に与える影響
— 準ランダム化比較試験による検討 —尾川 達也^{1,2)}, 大門 恭平^{1,3)}, 湯田 智久^{1,2)}, 森岡 周^{1,4)}¹⁾畿央大学大学院健康科学研究科 神経リハビリテーション学研究室,²⁾西大和リハビリテーション病院 リハビリテーション部, ³⁾高橋病院,⁴⁾畿央大学 ニューロリハビリテーション研究センター**key words** 回復期リハビリテーション・目標設定・ライフゴール

【はじめに、目的】

リハビリテーション(リハビリ)における目標設定は他職種チームと患者がどのようにリハビリを実行していくかを議論する過程と定義されており、目標設定に患者を参加させる重要性が強調されている。近年、目標設定に患者を参加させる1つのツールとして、ライフゴール概念というものが報告されている(Wade 1999, Dalton 2012)。この概念は患者の最も関心のある生活領域を評価し、直接または間接的にリハビリへ応用するため、動機づけの要因として考えられており(Nair 2003, Wade 2009)、心理機能への効果も期待されている(McGrath 1999, Conrad 2010)。しかし、ライフゴール概念を用いた目標設定が患者の心理機能や意欲に影響するかどうかは未だ検証されていない。そこで今回、ライフゴール概念を用いた目標設定が通常の目標設定と比較して、患者の心理機能や意欲に影響するかを検証することとした。

【方法】

対象は回復期リハビリ病棟の新規入院患者から採用した。除外基準は Mini Mental State Examination が 24 点未満のもの、精神疾患の既往のあるもの、入院 1 ヶ月以内の退院予定があるものとした。研究デザインは盲検化なしの準ランダム化比較試験とし、対象者を追加の目標設定介入を実施しない Control 群、体系的な目標設定介入として Goal Attainment Scaling (GAS) を実施した GAS 群、ライフゴール概念を取り入れて GAS を実施した Life 群の 3 群に割り付けた。また、割り付けの際に各群の心理機能の偏りを防ぐため Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS) の不安を用いて対象者の層別化を行った。介入期間は 4 週間とし、GAS 群では初期評価後に設定した目標を書面に記載し、目標達成度に関するフィードバックを週 1 回実施した。さらに、Life 群では Rivermead Life Goal Questionnaire を用いて患者のライフゴールを評価した。この評価は患者が日常生活で経験する 9 つの領域に関して、重要度と優先順位を評価するものである。この評価結果を参考に目標を設定し、ライフゴールとリハビリ目標が関連していることを十分に説明した。評価は初期評価を入院後 2 週間以内、最終評価を介入終了後に実施した。主要評価項目は不安と抑うつを HADS、精神的健康感を General Health Questionnaire 12 (GHQ)、リハビリ参加意欲を Pittsburgh Rehabilitation Participation Scale (PRPS) を用いた。副次的評価項目は日常生活動作に Functional Independence Measure (FIM) を用いた。また、介入後に患者へアンケートを実施し、目標設定における意思決定の程度を Patient Participation Scale (PPS)、入院時からの主観的改善度を Clinical Global Impression (CGI)、意思決定に関する満足度を Man Son Hing Scale (MSH) を用いて聴取した。統計解析は介入前、介入後の 3 群間の比較に Kruskal Wallis 検定を用い、多重比較は Steel Dwass 法を用いて実施した。有意水準は 5% 未満とした。

【結果】

Control 群に 22 名、GAS 群に 22 名、Life 群に 22 名が割り付けられ、Control 群で 3 名、GAS 群で 2 名、Life 群で 2 名が脱落した。初期評価において 3 群間に有意差はなかった。最終評価では HADS の不安において Life 群は Control 群と比較して有意に低かったが ($p=0.049$)、GAS 群とは有意差がなかった (Control 群: 6.5 ± 3.6 , GAS 群: 4.6 ± 3.3 , Life 群: 4.2 ± 3.1)。また、PRPS において Life 群は Control 群 ($p=0.030$)、GAS 群 ($p=0.019$) と比較して有意に高かった (Control 群: 4.9 ± 0.6 , GAS 群: 4.9 ± 0.4 , Life 群: 5.3 ± 0.4)。その他の評価項目に 3 群間で有意差はなかった。介入後のアンケートにおいても PPS, CGI, MSH ともに 3 群間で有意差はなかった。

【考察】

GAS にライフゴール概念を取り入れることで、追加の目標設定介入をしないものと比較して不安に効果があった。しかし、GAS 単独とは差がなかったことから目標の共有やフィードバックだけでなく、患者のライフゴールを目標に含めることでより不安が軽減したと考えられる。また、意欲に関しては GAS 単独のものと比較してもより効果があったことから、患者のライフゴールを評価しリハビリ目標との関連付けを強調するこの概念によって意欲が向上したと考えられる。

【理学療法学研究としての意義】

本研究では、入院患者を対象にライフゴール概念を取り入れた目標設定の効果を検証することができた。理学療法を実施する際の目標設定や共有において、患者自身の生活に関する意見をリハビリ目標に取り入れることの重要性を示した意義のある研究と考える。